令和３年度　小松市立安宅中学校　学校評価1（中間）

めざす生徒像

『智仁勇　未来を拓く生徒』
「智」　求めてやまぬ生徒
「仁」　思いやりのある生徒
「勇」　自ら行動できる生徒

※児童生徒達結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（%）教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	規律ある行動・自己有用感の醸成	生徒指導	・④を90%以上にする	①	学校では自分は大切にされている。		84			①は昨年より８％向上している。 ②は２年生が昨年より４％低下している。 ③は２年生が昨年より15%低下している。また、全体でも数値が低い。 ④全体で82%と目標の90%を達成できていない。２・３年生で昨年より低下している。特に３年生は受験生になり、３年生での不安等もあるのではないかと考える。 ⑤ほとんどの学年で90%をこえた。全体的に２年生の肯定的な回答の割合が低い。自己肯定感や自己有用感の低さが数値に影響しているのではいかと考える。	コロナ禍でも生徒どうしのつながりや認め合う機会を意図的に作っていくようにする。学校全体の行事（運動会・文化祭）、生徒会活動（安中サミット、ストック運動）、部活動などでそれぞれの活躍の場を与えていく。また、振り返る活動も行い、教師からの評価だけではなく、生徒どうしの認め合う場を確保し、自己肯定感や自己有用感を高めていく。 生徒どうしの絆づくりによって「学校が楽しい」と思う生徒の割合を増やしていく。
				②	学校にいると安心する。		76				
				③	学校では自分が役立っていると感じる。		56				
				④	学校が楽しい。		82				
				⑤	みんなで何かをするのは楽しい。		92				
					集計		78				

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目					達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		・①について100%にする	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	61				①が61%の原因として考えられることは、年度当初の業務が多かったことや５，６月の部活動の大会が複数回あったことである。 ②～④の項目に関しても低い状態である。新事業に伴う研修なども増え、校務分掌に偏りも見られるためである。定時退校日を設定しているが、徹底するための声かけが弱かった。	業務内容の見直し、個々の教員の時間管理（緊急の対応を除き、１週間で時間外を15時間以内にする。）、担当が複数いる業務について業務分担を行う。業務の整理・統合を企画委員会で検討していく。
				②	校務分掌や業務の整理・統合が図られており、業務の平準化がなされている。	56					
				③	月１回定時退校ができた。	44					
				④	計画的に休養をとることができた。	72					

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（%）教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	・すべての項目で90%以上にする	①	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っている。	94				①「考えを伝え合い、共に深め合うことができる道徳の授業づくり」をテーマに、定期的に講師を招聘し、校内研修を行うことができたため目標の９０％を達成している。 ②安中スタイルの提案や提案授業などで目指す授業像や授業づくりの視点を共有することができた。また、毎月道徳の研究授業を計画し、学年ごとに指導案検討会や授業整理会を行ったことが１００％に繋がった。 ③授業強化月間でのローテーション授業などにおいて、授業研究に主体的に取り組むことができた。また、その取組を学年や全体で共有できたことが１００％に繋がった。	予定している研修等について、今後も計画的に実施していく。また、職員会議などで研究主任が定期的に目指す授業像や授業づくりの視点を確認していく。教員の取組や共通実践していくことを、全体で共有する。
				②	研究主題に迫る目指す授業像（児童生徒像）を共有し、研究の視点に沿った授業研究会を計画的に行っている。	100					
				③	教職員一人一人が授業研究に主体的に取り組み、自校の授業改善に向けた取組を共有・実践している。	100					
					集計	98					
		授業	・①～⑥の生徒のアンケートの割合を90%以上にする	①	生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	67	77		10	①学年間で大きく差がある。２年生での肯定的な答えの割合が、昨年度に引き続き60%台と低い。１，３年生においても81%に留まっている。 ②⑤教員と生徒に10ポイントの差が出ている。活動は行っているが、そのことが考えを深めたり広げたりすることにうまく繋がらなかったことが生徒の数字に表れたのではないかと考える。 ③④コロナ禍ということで、発表するということに制限があり、機会も限られていることを考慮したとしても、低い数字である。記述力については、発表力と比べると、生徒のポイントが増加しており、何らかのことを書こうとする生徒が増えてきている。 ⑥教科やクラスによって大きく差はあるが全体の数字としては、生徒は90%を超えている。 ⑦各教員が形成的な評価を意識した授業を行っている結果となった。	①教師からの一方的な授業ではなく、教師の発話量を減らし、うまくコーディネートしていく授業づくりを推進する。 ②対話的な活動の目的を明確にして、自分の考えを深めたり広めたりするために効果的な「聞き方」の指導を推進する。 ③④発表の機会を確保し、発表の仕方の指導を丁寧に行う。また、振り返る活動などを使って、授業で記述する機会を確保する。その際、記述の内容に焦点をおいて指導する。さらに、効果的な記述の方法を学年や個のレベルに応じて進める。 ⑤学びのマップを利用して、友だちの考えや意見を聞いたり、自分の意見と比べたりすることの大切さを意識させる。 ⑥どの教科でも単元や題材のまとまりの中に必ず振り返る活動（まとめ・振り返り）の時間を確保する。また、その活動の意味を生徒と共有する。さらに、振り返る視点を吟味し、形式にも工夫する。 ⑦引き続き、授業での見取りや必要な場面での形成的評価を丁寧に行い、生徒、教員ともに学習の過程を修正しながら進めていく。
				②	生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	94	84		(10)		
				③	（発表力） 生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	83	77		(6)		
				④	（記述力） 生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	78	81		3		
				⑤	生徒は、友達と話し合うとき、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて（聞いて）、自分の考えを持つことができている。	94	84		(10)		
				⑥	生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	83	91		8		
				⑦	一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行っている	94					
					集計	85	82				
	学力の定着	学力調査	・すべての項目で90%以上にする	①	学力の重点目標や具体的な取り組みは全教職員で共通理解し、目標を達成できるよう取り組みは徹底して行っている。	94				①年度当初に昨年度からの効果的な取組や新たな取組を示して、共通理解を図って学力向上に取り組んだため、昨年度末の結果より６%の向上が見られた。 ②今年度は学習指導計画綴りに綴った学校力向上ロードマップを職員会議に持ち寄り、各担当から取組の実施状況等を報告しているので100%となった。 ③今年度もコロナ禍の影響を受け、小中合同の学力担当者会等は行わなかった。校内では自校採点結果と市平均の分析を行い、課題の洗い出しと取組の共通理解を図った。そのため、61%という結果となった。	①新たな取組として、定期テスト（中間・期末）の内容に応じて、活用力をはかる県評価問題等の類題を入れるなどし、活用力や記述力の向上に取り組む。 ②引き続き、学校力向上ロードマップを活用しながら、いつ、誰が、どのような企画・実施を行っていくのか共通理解を図って取り組み、実施状況について職員会議で検証していく。 ③校内での分析結果からは記述力に課題が見られたため、全教科共通で目的や視点、場面や状況、根拠を示させるなど、条件に沿った記述ができる指導を実践していく。
				②	学校力向上ロードマップにおける各自の役割を教職員が理解し、定期的な検証がなされている。	100					
				③	近隣等の小中学校と学力調査の結果や分析、成果や課題を共有している。（小中連携）	61					
					集計	85					
		家庭学習	・③の項目で90%以上にする	①	自分で計画を立てて勉強している。	56	60	63	4	①計画を立てる習慣が身に付いていないため、教職員・生徒・保護者の約60%しか肯定的な回答をしていない。 ②学校全体で、自学ノートや各教科の家庭学習課題に対する指導と評価が大切であると考えているため89%という結果になったが、指導と評価ができていないと感じている教員もいる。 ③１日に２時間以上という高い目標ではあるが、達成できたと感じている生徒は35%であった。時間の使い方などの指導の工夫をしていく必要がある。	①教室後方の黒板を利用し、各教科の学習課題がどのくらい出ているのか、いつまでに提出するのかを確認しながら、ライフ（生活ノート）を活用し、終礼前にその日に取り組む家庭学習課題の計画を立てていく。 ②家庭学習の取り組み方、生徒の学習意欲の向上や学力の定着につながるような評価・指導を実践していく必要がある。 ①・③１週間の家庭学習のモデルを示すなど、実現可能な家庭学習時間の提示を行う。また、各学年の現状に応じて家庭学習の内容を吟味する。
				②	生徒の家庭学習の評価・指導を行っている。	89					
				③	1週間に14時間以上を目標にして達成することができている		35				
					集計	73	48				